

自然教育園の蜻蛉の目撃記録（続報）

頼 惟 勤*

A Note of Odonata of the National Park for Nature Study in Tokyo (continuation)

Tsutomu Rai*

本稿は「自然教育園報告」第8号掲載の報文（頼，1978）に続くものであり，1977年初から1979年末までのトンボ類の目撃記録である。なお若干の考察を〔 〕に挿入して加えた。ここに重ねて園の各位の御厚情に深謝し，御教示賜った朝比奈正二郎先生・枝重夫先生に御礼申し上げる次第である。

上記報文は1977年10月までの状況であったが，その後，その年の12月末までの間に，内容上修正すべきことはなかった。念のため1977年を総括すると次のようになる。すなわち，成虫の非越冬性の種と越冬性の種とに分け，非越冬性の種の初見は4月20日のアジアイトトンボ（早未熟色，イモリの池）であり，終見は11月25日のアキアカネ（3頭，水生園）であった。一方，越冬性の種としては，オツネントンボは越冬中の個体を探し当てていないので，4月5日に水生園に飛来した成熟♂が初見であったが，ホソミオツネントンボは，成虫越冬の個体を観察し続けることができたために，要するに年初開園日（1月5日）以来，前年からのものを観察し続け，4月14日の越冬終了時に至った（頼，1977）。また年末秋冬期はホツミオツネントンボを12月16日まで見たが，あとしばらく見失ったまま年を越した。以上を総計して1977年に30種**を実見したことは，前稿に記したとおりである。

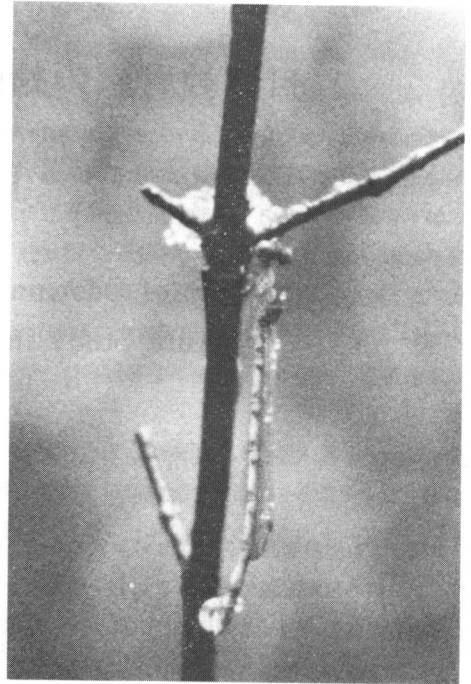
次に1978年における概況は，非越冬性の種の初見は4月28日のカワトンボ（♀，♀，ニシカワトンボ・ヒガシカワトンボの区別は不明，小鳥の森）であり，終見は12月12日のアキアカネ（♂，水生園）であった。一方，越冬性の種は，オツネントンボの場合，4月4日の成熟♂（水生園）が初見であり，ホソミオツネントンボの場合，1月27日の越冬中の早（ひょうたん池近辺樹林内）が初見であった。この年の実見種は27種であったが，これは前年の30種のうち，見ることのできなかつたものが3種（ウチワヤンマ・シオヤトンボ・コフキトンボ）であったためである。〔考察。この3種は本園としては稀なものであるので，観察時間の不足が主要原因と思われる。〕この年5月17日から6月24日まで，ヨツボシトンボが活潑に飛翔した。（水生園）別添の写真は，6月14日，連結中のものが，クロスジギンヤンマ♂に襲われたところである。3頭は不

* 日本蜻蛉学会員，A member of the Society of Odonatology, Japan

** キイトンボ・アジアイトトンボ・アオモンイトトンボ・クロイトトンボ・オオイトトンボ・オツネントンボ・ホソミオツネントンボ・オオアオイトトンボ・カワトンボ・ヤマサナエ・ウチワヤンマ・ギンヤンマ・クロスジギンヤンマ・オニヤンマ・シオカラトンボ・シオヤトンボ・オオシオカラトンボ・ヨツボシトンボ・ショウジョウトンボ・コフキトンボ・ナツアカネ・アキアカネ・マイコアカネ・マユタテアカネ・リスアカネ・コノシメトンボ・ノシメトンボ・コシアキトンボ・チョウトンボ・ウスバキトンボ。



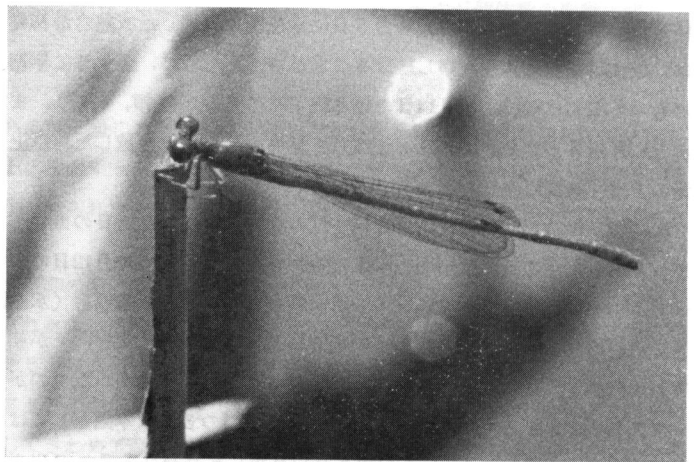
ヨツボシトンボ連結♀を襲うクロスジギンヤンマ♂, 1978. 6. 14水生園



降雪中のホソミオツネントンボ♀, 1979. 1. 13
気温1°C, 園内樹林中

器用に飛翔移動してこの位置に停止した。

この年の12月3日から翌1979年3月25日までの間、ホソミオツネントンボ♀（ひょうたん池近辺樹林内）の越冬を観察した（頼, 1979）。越冬終了移動の3月25日、気温は13時45分前後に17°Cに達し、ついに飛翔しはじめた。写真は1月13日9時10分、降雪時（気温1°C）の状況である。〔考察。この個体について、体色と気温との関係を調査しようとしたが、成熟色になる前に移動してしまい、目的を果さなかった。ただし、越冬中の茶褐色自体、濃褐色になったり、やや脱色したりの変化があり、変化の条件は、なお調査の要があると思われる。〕



不時出現のベニイトトンボ♂, 1979. 10. 10水生園

次に1979年における概況は、非越冬性の種の初見は4月24日のアジアイトトンボ（♂, 水生園）であり、終見は11月20日のアキアカネ（♂ 2, 水生園）であった。一方、越冬性の種は、年初の場合は上述した。また年末の場合は、ホソミオツネントンボの個体は稀ではなかったが、すべて一か所に定着することなく、12月27日の♀（前年年初と同じ枝先、12時00分に15°C）の移動飛翔に立合って以後、翌年3月13日（♀, 小鳥の森）まで見失った。この年は前年の27種に比べて、見ることのできなかつたもの8種（アオモンイトトン

ボ・オツネントンボ・ヤマサナエ・ヨツボシトンボ・マイコアカネ・マユタテアカネ・リスアカネ・チョウトンボ)に及んだが、本園としては初見のベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum* ASAHINA (♂, 10月10日, 水生園, 写真参照)が1種加わり、都合20種を実見した。〔考察。ベニイトトンボが単独に出現するのは不自然であるとの朝比奈・枝両博士の御指摘により、園内の産地を探索中のところ。1980年9月3日(2♂)と、同5日(1♂)とに、昨年とほぼ同じ地域をパトロールする本種を見た。次に8種減は観察の機会の半減によるものであるが、年次を通じて減少傾向が認められるものにヤマサナエ・カワトンボ・キイトンボがあり、反対に増加傾向が認められるものにコシアキトンボがある。〕

参 考 文 献

- 頼 惟勤. 1977. ホソミオツネントンボの成虫越冬の観察. Tombo, 20 (1/4) : 8—12.
 ————. 1978. 自然教育園の蜻蛉の目撃記録. 自然教育園報告, 8 : 60—71.
 ————. 1979. 晩秋以後のホソミオツネントンボ. 昆虫と自然, 14(6) : 36—37.

蜻蛉類に関する研究（抄録）

頼惟勤. 1978. 自然教育園の蜻蛉の目撃記録. 自然教育園報告, 8 : 60—71.

1974年から1977年までの園内におけるトンボの観察の結果である。

実際にみられた種と昆虫目録（自然教育園基礎資料, 1952）中にみられ、今回未確認の8種の計41種について記した。

各種ごとに実視時の時期、概略を示すと同時に、生態観察の概要、地域、年ごとの状況などを表にして表示した。

訂正

8号のp. 63, 31行め 「打水」を「挿泥飛翔」と訂正

同じく8号のp. 68の表,

表内1行め「オオヤマトンボ」の段 74年が×, 75年が○

表末の「計」の段 74年が23, 75年が24